

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770164

研究課題名(和文) 有賀長伯のテニヲ八観に関する研究 『和歌八重垣』と『春樹顕秘増抄』を手がかりに

研究課題名(英文) the language consciousness of Chohaku Ariga as an author (TENIWOHAKAN)

研究代表者

劉 志偉 (LIU, ZHIWEI)

首都大学東京・人文科学研究科・助教

研究者番号：00605173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：「姉小路式」の流れを汲む旧派のテニヲ八論書では最高傑作が『春樹顕秘増抄』とされている。しかし、著者としての有賀長伯の言語意識(テニヲ八観)から考えた場合、『春樹顕秘増抄』のみならず、『和歌八重垣』の記述をも重要視しなければならない。このように、日本文法研究史における有賀長伯の言語意識を明かにすることが本研究の研究目標である。同じ著者を持つ両書の記述を比較し、テニヲ八論研究史において最も重要な人物の一人である有賀長伯の言語意識(テニヲ八観)ことを明らかにすることにより、日本文法研究史の断片史として当該分野に新たな成果をもたらすことができると考える。

研究成果の概要(英文)：Among the literature on the “KYUUHA” of TENIWOHA that drew from the “Anegakouji-shiki” style the masterpiece is widely considered to be “Shunjukenpizousho”. However, when considering the language consciousness of Chohaku Ariga as an author (TENIWOHAKAN), it is also important to focus on the narrative given in “Shunjukenpizousho” and “Wakayaegaki”. Therefore, the goal of this research is to explicate the language consciousness of Chohaku Ariga within the context of the history of the study of TENIWOHA theory. By comparing the two books written by Chohaku Ariga, one of the most significant persons in the history of TENIWOHA theory study, we attempt to explicate the language consciousness that he had. By doing so, we hope to bring new revelations to this slice of Japanese grammatical history and help advance the relevant field of study.

研究分野：人文学言語学日本語学

キーワード：テニヲ八 有賀長伯 和歌八重垣 春樹顕秘増抄 姉小路式

1. 研究開始当初の背景

有賀長伯(1661 - 1737)は江戸前期から中期の歌学者。江戸時代前期の二条家歌学の普及に貢献した人物である。代表作の一つに『春樹頭秘増抄』があり、「姉小路式」の流れを汲む旧派のテニヲ八論書の最高傑作とも称される。テニヲ八論研究を日本語研究の雛形と見る立場からすれば、有賀長伯は江戸期以前の日本語文法研究史において言及しなければならない人物の一人である。また彼の言語意識(テニヲ八観)も江戸期以前の日本語文法史において看過できないのも言うまでもない。しかし、有賀長伯の言語意識を明らかにするには『春樹頭秘増抄』のみならず、同じく彼の著『和歌八重垣』の記述をも考え合わせる必要がある。従来のテニヲ八論研究では有賀長伯のテニヲ八論と言えば『春樹頭秘増抄』に代表されるという基調にあり、『和歌八重垣』における(テニヲ八関連の)記述が『春樹頭秘増抄』に比べて量的に少なく、記述内容も簡略的であるため、有賀長伯のテニヲ八観としては見逃されてきた経緯がある。ところが、『和歌八重垣』の記述を詳細に確認していくと、有賀長伯による独自のテニヲ八観が顕著に現れているのはむしろ『和歌八重垣』のほうであると考えられるのである。なぜならば『春樹頭秘増抄』は「姉小路式」の直系増補本系列に属する書であるゆえに、有賀長伯は自らのテニヲ八観を取り入れつつ増補を行ったとはいえ、祖説の「姉小路式」の枠に囚われた面もあり、その説明に限界があったからである。

実際に『和歌八重垣』を扱った先行研究が少なく、佐藤(1973、1988)によるこの書におけるテニヲ八関連の記述の翻刻及びその解説があるほか、『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』の成立の前後関係に論点を置いた山田(1943)と古田(1956)がある。前者は『春樹頭秘増抄』の中から秘密にすべき部分、必要でない部分を除いて新研究を加えて『和歌八重垣』を起草したと主張するのに対し、後者は先に成立した『和歌八重垣』の元となる「有る書」をさらに別に増補を加えたのが『春樹頭秘増抄』であるとする見解である。これらの先行研究は『和歌八重垣』の記述に即した解説または書誌学上の成立の前後関係に関心があり、日本語文法研究史の流れにおける有賀長伯の言語意識に立ち入った研究ではない。

『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』には共通の文法項目が多く取り扱われており、両書の記述を比較することで有賀長伯による独自の言語意識を明らかにすることができる。また、有賀長伯の言語意識の変遷を辿ることにより、書誌学の面とは別に記述内容の面から『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』の成立

に関する前後関係を呈することもできると考えられる。

2. 研究の目的

テニヲ八論に関する研究は、その内容が現在の研究レベルからみて低いことからさほど研究対象として重要視されていない。日本語史概説書に概論的な言及があっても、日本語文法研究史の流れの中において如何にしてテニヲ八論研究から江戸期の日本語学研究へと繋がったのかという具体的なプロセスを示した体系的な研究が未だみられない。本研究は、研究代表者がこれまで成されてきたこうした視点に立った研究の一環として日本語文法研究史の断片史(中でも有賀長伯の言語意識の全流れにおける位置づけ)を補強して当該分野に新たな成果をもたらすことを目的とする。

本研究は旧派テニヲ八論研究史における重要な人物である有賀長伯の著とされる『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』の記述に対する考察を通して、有賀長伯の言語意識(テニヲ八論)を明らかにすることを主たる目標とする。

3. 研究の方法

本研究は、『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』における記述の調査、整理、比較という手法によって、有賀長伯の言語意識(テニヲ八観)の一端を明らかにする。具体的な手順と方法は以下の通りである。

- (1) 『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』における記述の調査作業と確認作業を行う。
- (2) 先行するテニヲ八論書の項目を反映さえ、両書に取り上げられた文法項目の一覧表を作成する。
- (3) 先行するテニヲ八論書を参照し、『和歌八重垣』の記述を『春樹頭秘増抄』と類似した説明を施している小項目 異なった説明を行った小項目 『春樹頭秘増抄』にはない小項目を考察する。

以上の考察を通して有賀長伯のテニヲ八観をあぶり出すと同時に、両書の成立の前後関係そしてこの二書に先行するテニヲ八論書の記述との関係をも明らかにすることができる。

4. 研究成果

(1) 劉(2016)は、「姉小路式」の記述を手がかりに、『春樹頭秘増抄』と『和歌八重垣』との比較を行い、『手尔葉大概抄』と『手尔葉大概抄之抄』からの影響についても考察した。その際、既存の書を増補するに際しての有賀長伯と『春樹頭秘抄』の著者との

研究姿勢の違いをも視野に入れた。

劉(2012:24-27)では、初期のテニヲ八論書(『大概抄』『姉小路式』『抄之抄』)の記述の中で後世を悩ませた難解な用語として「詰め刎ね」と「治定」があることを論じた。

劉(2016)では、第一にこの二語が現れるのは「はねてには」の巻であること、第二に『春樹顕秘増抄』の記述に比べて『和歌八重垣』において有賀長伯が意図的にこの二つの用語を回避した形跡が窺え、『和歌八重垣』に有賀長伯のテニヲ八観が最も顕著に表れている箇所であること、この二点から「はねてには」の巻を取り上げて比較することとした。

「姉小路式」系列の増補本における「はねてには」の下位項目の増減については以下の通りである。『春樹顕秘増抄』の4の「二字刎ね」は、有賀長伯のテニヲ八観によって加えられた新たな記述である。これは『抄之抄』の4「詰め刎ね」の箇所にある「一字刎ね」を意識したものと思われる。

一方、「はねてにはの事」の巻で言及されなくなった項目、他の項目に統合された項目もある。第一に、「姉小路式」の2「たゝしかつらきやしかのうらやなには江やなどいへるはよひたしのやといひてはねす」は、『春樹顕秘抄』にあつて、『春樹顕秘増抄』と『和歌八重垣』にはない。この記述は「姉小路式」の第四巻(「やの字の事」)の内容であり、ここに挙げる必要がないことを意味していよう。『春樹顕秘抄』がこの項目を残しているのは、『春樹顕秘抄』の著者は「姉小路式」を忠実に踏襲する立場を取っているためである。第二に、「姉小路式」の3「たゝうたかふことはうたかひのやにてはぬるなり」が『春樹顕秘抄』『春樹顕秘増抄』『和歌八重垣』ともなくなっている。この箇所は歌中のヤとランとの呼応をいうが、「姉小路式」の1にラン留りと呼応する歌中の「疑ひの言葉」の一つとしてすでにヤを挙げており、一種の重複である。第三に、「姉小路式」の1の記述の一部である「これらのことはのいらすしてははねられ侍らぬそ」(『抄之抄』の2「此詞なく心にもちてもはぬる也。」に相当)と、「姉小路式」の4「又治定(ぢぢやう)してはぬること見んねんせむけんなむこのるひなり」は、『春樹顕秘増抄』の2に統合されている。また、『和歌八重垣』の2においてはさらにこの『春樹顕秘増抄』の2と『春樹顕秘増抄』の5を体系づけようとする意図が認められる。なお、『春樹顕秘増抄』の5は「姉小路式」の5・6・7の複合体と見なすことができ、後述する「詰め刎ね」の記述の混乱をもたらす原因となるのである。

「詰め刎ね」という用語には異なった二種類の見解があつた。また、増補本系列においては、「詰め刎ね」が「口伝の刎ね」である

ゆえに「一字刎ね」「のゝ字刎ね」等複数の別称を有する結果となり、後世に至っては解釈できないまたは曲解されるような事態となってしまうのである。『和歌八重垣』に「詰め刎ね」という用語が使われていないのは、有賀長伯がその経緯と事態を看破し、意図的に回避した可能性がある。『和歌八重垣』における、「久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく」という証歌の出現箇所を確認しても、そのような有賀長伯の意図があつたことが読み取れる。この歌は『和歌八重垣』の2「又前のことく上にうたがひの字なくてはねたるもあり。」の証歌の一首として登場しており、「上に疑ひの字なくて刎ねたる」とは、歌中に疑ひの言葉がない場合のランとの呼応を指している。

同 ともりの

久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん

是は春の日にといふ下へいかたと心をそへて聞也。口伝也。(佐藤1988:83)

このように、テニヲ八論書には多くの口伝が含まれていたが故に、その内実を知ることができず、項目や記述の増補が行われていくうちに、様々な曲解が生まれていったのである。結局、後世に至りますます解釈が難解な箇所になってしまったのである。この箇所に限っていえば、本来「詰め刎ね」云々というより「心にて疑う」のような、単なる「疑ひのことば」の有無の説明に用いるべき歌が、「詰め刎ね」の箇所に混用されてしまっている。これらの用語が混用されている事実気づいた有賀長伯が『和歌八重垣』において実質同じ内容(疑ひの言葉を伴わずランと呼応するタイプ)を述べている『春樹顕秘増抄』の2と5を『和歌八重垣』の2に統合させたのではないかと考えられるのである。

「治定」はテニヲ八論における難解な用語の一つで、概ね「非疑ひのことば」を指す(劉2012:27)。『和歌八重垣』の2と3はそれぞれ歌中に疑ひの言葉を伴わない場合と強調系の言葉を伴う場合を指している。非強調系と強調系との違いはあるものの、両者はともに「非疑ひの言葉」に属するものであるという捉え方も可能である。従って、「治定」という用語が用いられなかったことは、有賀長伯による理に叶った回避であると考えられる。

このように、『春樹顕秘増抄』は「姉小路式」の直系増補本であるゆえ、有賀長伯は『抄之抄』の影響を受けながらさらに自らのテニヲ八観を取り入れてはいるものの、祖説の「姉小路式」の枠の中での増補作業しか展開できなかったと考えられる。一方、『和歌八重垣』においては、有賀長伯は「姉小路式」とは別の流れを汲む『抄之抄』の記述を参照

した上で、より洗練された記述がなされている。項目の構成のみならず、これまで考察してきたように、細かい箇所の記述内容に関しても『和歌八重垣』のほうが『春樹顕秘増抄』よりも記述の上で優れたところが多い。『和歌八重垣』のほうがより全面的に有賀長伯の言語意識(テニヲ八観)を表していると思われる。

無論、『春樹顕秘増抄』と『和歌八重垣』の成立関係及び記述内容についてはこの二書の編纂目的も視野に入れなければならない。つまり、『春樹顕秘増抄』は非公開の「相伝の書」(古田 1956:25)であるのに対し、『和歌八重垣』は公刊された初学の啓蒙書で歌学辞書の性格を持つ。この点を取り入れた総合的な説明が求められるが、それをさらなる今後の課題としたい。

(2) 日本語そのものに対する文法意識という視点において、テニヲ八論と日本語教育文法との間に相通する点が認められる。テニヲ八論は、邦人に和歌の詠歌上のテニヲ八を教えるものであり、当時の日本人の文法意識を反映するものである。このような当時の日本語に対する「言葉の指導」という見地は、現代日本語教育にも寄与できる点があると思われる。

例えば、五十音図は悉曇学の影響を受けて誕生したとされ、古くから語源の説明等において、五十音図の各行または各段で音が交替する考え方が「同音相通」「同韻相通」「五音相通」等の用語を用いて日本語の原理の説明として行われてきた。その後初期の連歌論や和歌作法においても五十音図の各行と各段の音に注目した記述が見られる。例えば、初期のテニヲ八論書には以下のような記述がある。

曾者字具須津奴之通音(根来 1979:7)
そのちにあまたのとまりあり五音第三の音にておさへたり第三の音とはうくすつぬふむゆるふうわれそとふ(根来 1980:6)

古曾者兄計世手之通音(根来 1979:6)
およそこそといへるとまり第四の音にてとまるへし第四の音とは糸江けせてねへめ江れへ糸物をこそおもへ(根来 1980:11)

これは句(歌)中の「ぞ」「こそ」がそれぞれ句(歌)末の「第三の音」(概ねウ段)と「第四の音」(概ねエ段)と呼応関係を成す現象についての指摘である。このような当時の邦人による文法意識を反映する言及が後の「係り結び研究」と「活用体系研究」の解明に光明をもたらしたとされている。こうした「五音」に代表される日本語の各行各段という視点から注目されてきたこれらの現

象は日本語の特質の1つであると考えることができる。古典語の名残としての関西方言のウ音便と、「やべー」「ねえ」のような話し言葉も「五音(相通)」の枠組みの中で捉えることができる。テニヲ八論をはじめとする「五音」を当時の邦人の文法意識を反映するものとして位置づけるのであれば、関西方言のウ音便といわゆる標準語におけるイ形容詞の工段長音化の学習を「五音(相通)」の枠組みの中で捉えて学習することは学習者(の視点)による文法意識と見なすこともできる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

劉志偉、「日本語文法の史的 연구と日本語教育との接点 関西方言のウ音便と話し言葉におけるイ形容詞の工段長音を例に」『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第4号、pp.65-74、査読あり、武蔵野大学日本文学研究所、2017年3月
劉志偉、「『和歌八重垣』と『春樹顕秘増抄』に見られる有賀長伯のテニヲ八観 「はねてには」の記述を手がかりに」『言語の研究』第2号、pp.1-13、査読あり、首都大学東京言語研究会、2016年7月

[学会発表](計2件)

劉志偉 「ウ音便とやべーと日本語学習者 日本語文法の史的 연구と日本語教育との接点」第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム、2016年11月19日~20日 香港公開大学(香港(中国))
劉志偉 「川平ひとし著『中世和歌論』を書き言葉として読む」日本語/日本語教育研究会第8回大会(第4回ビブリオバトル)2016年10月2日 学習院女子大学(東京都・新宿区)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 劉 志偉
(LIU Zhiwei)
首都大学東京・人文科学研究科・助教
研究者番号：00605173

(2)研究分担者 ()
研究者番号：

(3)連携研究者
()
研究者番号：